

視界不良の調査捕鯨

2月28日、農水省は、3月まで実施を予定していた南極海での調査捕鯨を打ち切ることを決定しました。その原因は、シー・シェパードの妨害行為によって、調査捕鯨の危険性が増したということのようです。

捕鯨を巡っては国際的にも様々な議論があるところであり、また、今日、主に食料として捕鯨している国は日本だけではありませんが、とにかく日本の捕鯨がジャパンバッシングの材料の一つになっていることは、残念に思います。

日本の調査捕鯨が曲がり角に来ていることは確かであり、今後、そのあり方について冷静な議論を重ねていく必要があると考えておりますが、ただ、今回の農水省における南極海での調査捕鯨の打ち切り方針に対して、胸にざらついたものを感じるのは果たして私だけでしょうか？

この胸のもやもや感は何なのだろうと考えました。その結果、幾つかのことが頭に浮かびます。

一点目は、正義の押しつけということだと思います。シー・シェパードの皆さんは、自分たちは正義である。正義を実現するためには何をしても良いというように考えている。つまり、暴力もいとわないということで、実際、命にも関わるよう危険なことがあったようです。

捕鯨に反対する人には、当然反対する理由があるでしょうし、それを正義と主張するのも自由です。しかし、私は、この「正義のためなら何をしても良い」という考え方そのものに強い違和感を覚えます。

二点目は、鯨は知的な高等動物だから守るべきであるという話が時々出てきます。この、鯨の知性についても様々な議論がありますが、この議論の危うさは、命に守るべきものそうでないものがあるという考え方を想起させるからです。

家畜は人間が利用するために飼育しているので、食べてかまわないという話も良く聞きますが、これも先程の話と表裏一体であり、人間の傲岸さを感じてしまいます。

人間は、他の生き物の命をいただいて生きていかねばならない存在である、という宿命を背負っていることへの謙虚な姿勢が必要ではないでしょうか。

三点目は、日本という国は、結局のところ、強い相手には引いてしまおうということなのか、との忸怩たる思いです。

勿論、暴力的に問題を解決すべきであるといっている訳ではありません。しかし、調査捕鯨を継続するという選択肢から打ち切りという選択肢までの間に、もっと取るべきものがあつたのではとの思いを禁じ得ません。

今回の措置によって問題解決の方向が、益々不透明になるのでは、と危惧しています。 （塾頭 吉田 洋一）